



臨終凶巻

年始めは、少しいつもと趣向を変えて生者を取り上げましよう。

大手建設機械メーカー「コマツ」の元社長、安崎暁さんです。昨年12月11日、東京都内のホテルに関係者約10000人を集めて「生前葬」を開催しました。

安崎さんは、大学卒業後、1961年に同社に入社。1995年に社長に就任。バブル崩壊、建機不況の中で、中国での現地法人を設立するなど、いち早くグローバル化を推し進めて危機を乗り越えた敏腕経営者として知られます。

その安崎さんに胆のうがんが見つかったの

36 安崎暁

長尾和宏（ながお・かずひろ）医学博士。東京大学医学部第二内科入局。1995年、京都府京都市で「人を診る」総合診療を目指す。近著「痛くない死に方」は、関西国際大学客員教授。

は昨年10月のこと。すでに肺や肝臓などに転移しており、手術はできないと診断されました。無駄な延命治療はやらないと決め、診断から1カ月後の11月には生前葬を行う旨を新聞広告を打っています。なんと迷いなき決断だったのでしょうか。



生前葬はしめやかではなく、実に明るく、にぎやかに行われたそうです。安崎さんの故郷・徳島の阿波踊りまで飛び出し、誰もが終始笑顔だったそうです。以下は、生前葬後の記者会見での言葉です。

「私は半年前はものすごく元気があったんですね。それと（今の健康）落差が大きすぎて……。なんか、自分の人生の最終段階で説明責任を果たしていなような感じがしたのですから。私の人生で巡り合った人々が、長くは話せなかったのですが、握手をして、ありがとう

ございましたと言えたことに、非常に満足しています」

「延命治療を行わないというのは、まったく私個人の考えですが、社長をやめて会長になってから、『日本尊厳死協会』に家内とともに入り、無理な延命治療をやらないということを願っていました。家内の勧める食事療法はやっています。私は、がんとの平

和的共存と言っています」
私は、日本尊厳死協会副理事として会員である安崎さんがこのようなお話をされたことに深い感銘を覚えました。自分の人生の最終段階での説明責任「まさにこれこそが「リビング・ウィル（生前遺言）」であり、延命治療を行わないことこそが、がんとの平和的共存。ただし卓見です。

男女の別れ、故郷との別れ、友との別れ、家族の別れ……。人生に別れば付き物ですが、大人ならば「ありがとう」で終わらせたい。

死んでからでは「ありがとう」が言えません。だから、悲しみよりも感謝が先に立つ生前葬に、私も大いに賛成です。

80歳の安崎さんに比べれば、私はまだまだひよっこですが、この夏、還暦を迎えるにあたり、生前葬を開く予定です。ぜひ私の葬儀に、安崎さんにお越しいただけたらと願ってやみません。

感謝「伝える生前葬